

レポート「沖縄県内宿泊施設の需給動向」

1. はじめに

沖縄県内の入域観光客数と宿泊施設軒数の推移をみると、どちらも高い伸びを示している（図表1）。

入域観光客数は、2013年度から2017年度まで5年連続で過去最高を更新しており、同期間は10%前後の伸びを示している。

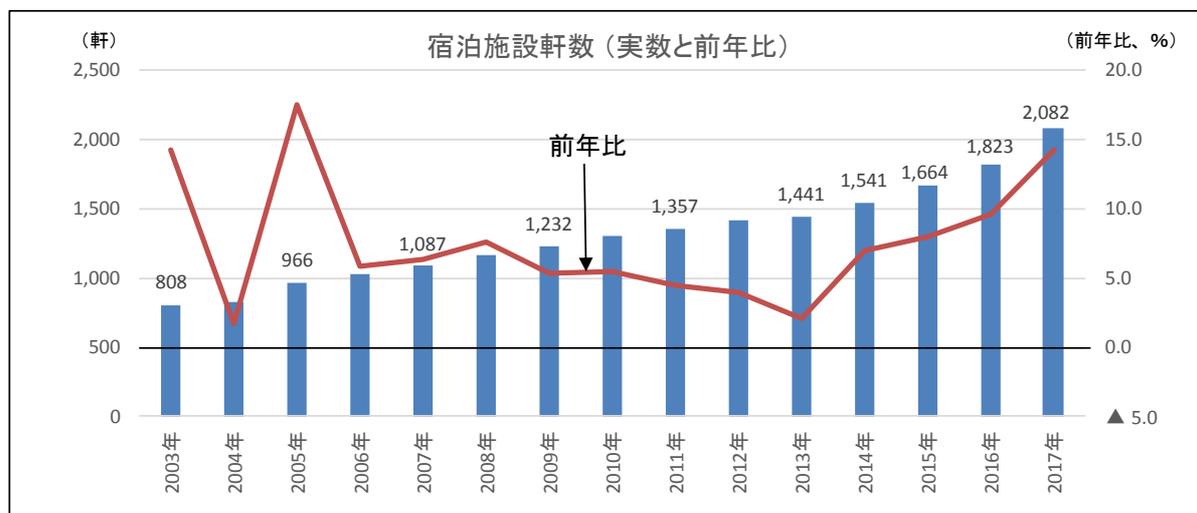
宿泊施設軒数も好調な入域観光客数を追い風に増加している。2014年以降は伸び率が高まってきており、2017年は14.2%の伸び率となった。

本レポートでは、空路入域客をベースにした人泊数と宿泊施設の収容人数の将来予測を算出して、宿泊施設の需給バランスについて考察したい。

【図表1】入域観光客数と宿泊施設軒数の推移



出所：沖縄県文化観光スポーツ部「入域観光客数概況」



出所：沖縄県文化観光スポーツ部「宿泊施設実態調査結果」

2009年までは各年の10月1日現在、2010年以降は各年の12月31日現在

2. 空路入域客数

(1) 現状分析

入域観光客数は利用する交通手段により、航空機を利用する空路入域客と、クルーズ船等を利用する海路入域客に分けられる。一般的に、空路入域客は宿泊施設で宿泊するが、海路入域客はクルーズ船での宿泊であり宿泊施設の利用はないとみられる。本レポートでは、宿泊施設の需給バランスについて考察するため、入域観光客数のうちの空路入域客を用いることとする。

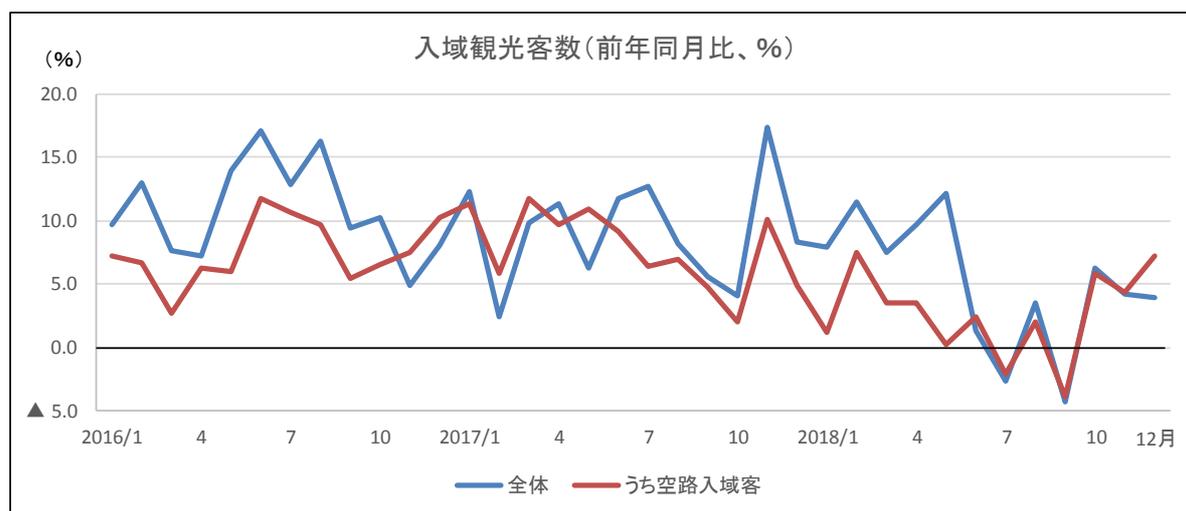
2013年度以降の前年比伸び率推移をみると、空路入域客、海路入域客ともに前年を上回る推移を示している(図表2)。ただ、海路入域客の伸び率に比べると、空路入域客の伸び率は小さいことから、全体に占める空路入域客の割合は年々低下していることが分かる。

【図表2】空路入域客と海路入域客の推移

	実数(人)			前年比(%)			全体に占める割合(%)		
	入域観光客数			入域観光客数			入域観光客数		
	空路入域客	海路入域客		空路入域客	海路入域客		空路入域客	海路入域客	
2013年度	6,580,300	6,355,500	224,800	11.1	10.6	25.1	100.0	96.6	3.4
2014年度	7,169,900	6,874,800	295,100	9.0	8.2	31.3	100.0	95.9	4.1
2015年度	7,936,300	7,389,800	546,500	10.7	7.5	85.2	100.0	93.1	6.9
2016年度	8,769,200	8,026,500	742,700	10.5	8.6	35.9	100.0	91.5	8.5
2017年度	9,579,900	8,532,900	1,047,000	9.2	6.3	41.0	100.0	89.1	10.9
2018年度	7,589,300	6,614,700	974,600				100.0	87.2	12.8

出所：沖縄県文化観光スポーツ部「入域観光客数概況」。2018年度は9カ月分(4月～12月の数値)の実績。

【図表3】入域観光客数と空路入域客の推移(前年同月比、2016年1月～2018年10月)



出所：沖縄県文化観光スポーツ部「入域観光客数概況」

次に空路入域客の推移を、2016年1月から2018年12月までの前年同月比の動きでみる(図表3)。この期間は、ほとんどの月で前年同月を上回る伸び率を示している。2018年7月と9月は前年同月を下回っているが、7月は「平成30年7月豪雨(西日本)」や県内外への台風接近が影響したとみられ、9月は県内への台風接近が影響したものとみられる。つまり特殊要因(自然災

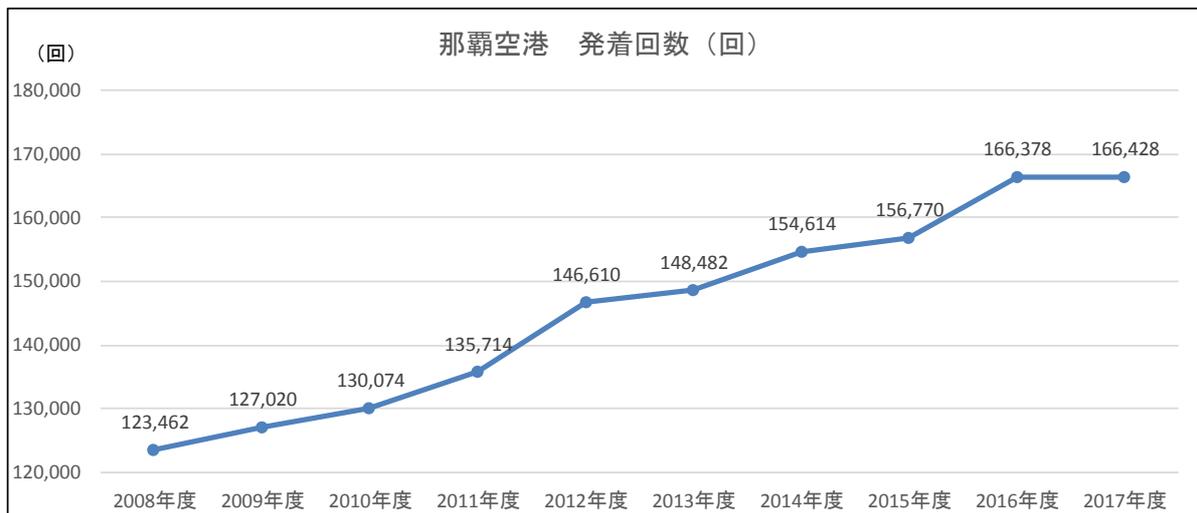
害)の影響が大きかったと言える。

特殊要因を除いた動きをみると、気になる点が見られる。足元の2018年10月～12月を除くと、2017年頃から伸び率に鈍化の動きがみられ、右肩下がりの推移をしていることである。

この要因の1つとして、那覇空港の容量が限界に上限に近づいている可能性が考えられる。現在、那覇空港は2020年3月の第2滑走路供用開始を目指して工事中である。国土交通省航空局によると、現行の滑走路1本で安定的な運用ができる発着回数目安(以下「発着回数目安」という)は135,000回となる。

一方、発着間隔の時間短縮や早朝便、深夜便などの工夫により、現状は発着回数目安の135,000回を上回る発着実績がある。2016年度および2017年度の実績は、発着回数目安の135,000回の1.23倍にあたる166,000回を超えている(図表4)。ただ、2016年度と2017年度の発着回数はほぼ横ばいとなっており、発着実績は増加傾向に頭打ちの動きがみられる。

【図表4】那覇空港発着実績の推移



出所：国土交通省「暦年・年度別空港管理状況調査」の着陸回数 (注) 着陸回数×2を発着回数とした

(2) 将来予測

以上の現状分析を踏まえて、空路入域客のシミュレーションは2パターン予測した(図表7)。

●空路入域客シミュレーション①：空路入域客は一貫して増加する予測

2018年度の見込みは、足元実績(2018年4月～12月)から算出した。2019年度以降は、過去5年(2013年～2017年)の平均増減数にて増加を続けると予測した。一貫して増加する根拠としては、図表5の那覇空港の発着回数目安と実績の差異を挙げることができる。第2滑走路完成後の発着回数目安は185,000回と言われており、2017年度実績からみると、1.11倍の増加余力に留まる。しかしながら、前述のとおり現状でも目安を1.23倍上回る発着実績があることを考慮すると、第2滑走路完成後にも目安を上回る発着実績が可能と考えられる。よって、早朝便や深夜便の増加などの工夫により、空路入域客シミュレーション①では、一貫して増加すると予測した。

●空路入域客シミュレーション②：空路入域客は、横ばい⇒増加⇒横ばい、で推移する予測

現行の1本の滑走路では処理容量の上限に近づいている可能性があることから、2018年度および2019年度は横ばい推移とした。第2滑走路の供用開始後の2020年度から2024年度までは増加に転じるとした。同期間の増加人数は、過去5年（2013年～2017年）の年間平均増減数557,580人を用いた。そして、2025年度以降は第2滑走路の供用後の処理容量の上限に近づくとして再び横ばい推移とした。

空路入域客シミュレーション②の根拠としては、図表4の那覇空港の発着実績の推移を挙げることができる。これまで順調に増加していた発着回数が2017年度は頭打ちとなっている。前述のとおり空港（管制）側の工夫により、これまでは発着回数の増加対応を行ってきたが、そろそろ、その工夫も限界に近づいてきているとの想定での予測である。そのため、第2滑走路の供用開始までは横ばいとし、供用後に再び増加に転じるという予測である。ただ、第2滑走路供用後もいずれは処理容量の上限に近づき、再び横ばいで推移するとの予測である。ところで、現行1本の滑走路での発着回数目安135,000回に対して、実績は166,000回（1.23倍）の実績がある。第2滑走路供用後の発着回数目安185,000回の場合は、1.23倍を乗じた227,550回を処理容量の上限と想定した。（注）

(注) 現行の滑走路1本の発着回数目安135,000回⇒2017年度の実績166,428回（1.23倍）
 実績166,428回での空路入域客8,532,900人
 第2滑走路完成後の発着回数目安185,000回⇒処理容量の上限予測227,550回（1.23倍）
 上限予測227,550回で想定されるの空路入域客11,604,744人

※上記発着実績は那覇空港のみ。一方、空路入域客は宮古島、石垣島を含む沖縄県全体の数である。
 ただ、那覇空港の発着回数は沖縄県全体の約8割を占めていることから、今回は便宜的に上記の比較をした。

【図表5】那覇空港の発着回数目安と実績

	発着回数	倍数		発着回数
現行の滑走路1本の目安	135,000回		第2滑走路完成後の目安	185,000回
2015年度実績	156,770回	1.16倍	目安×1.16倍	214,600回
2016年度実績	166,378回	1.23倍	目安×1.23倍	227,550回
2017年度実績	166,428回	1.23倍	目安×1.23倍	227,550回

出所：国土交通省「暦年・年度別空港管理状況調書」の着陸回数（注）着陸回数×2を発着回数とした

【図表6】 空路入域客の実績

		入域観光客数(人)		うち空路入域客(人)				うち海路入域客(人)			
		うち国内客	うち外国客	増減数	うち国内客	うち外国客	うち国内客	うち外国客			
実績	2003年度	5,129,700	5,020,900	108,800	5,033,300	273,500	4,978,800	54,500	96,400	42,100	54,300
	2004年度	5,171,600	5,048,700	122,900	5,076,200	42,900	5,012,800	63,400	95,400	35,900	59,500
	2005年度	5,571,500	5,433,600	137,900	5,463,300	387,100	5,396,400	66,900	108,200	37,200	71,000
	2006年度	5,705,100	5,608,300	96,800	5,644,200	180,900	5,574,700	69,500	60,900	33,600	27,300
	2007年度	5,892,300	5,703,500	188,800	5,759,700	115,500	5,669,500	90,200	132,600	34,000	98,600
	2008年度	5,934,300	5,697,300	237,000	5,764,900	5,200	5,663,900	101,000	169,400	33,400	136,000
	2009年度	5,690,000	5,443,800	246,200	5,510,200	▲254,700	5,410,300	99,900	179,800	33,500	146,300
	2010年度	5,705,300	5,430,400	282,800	5,547,900	37,700	5,396,300	151,600	165,300	34,100	131,200
	2011年度	5,528,000	5,287,000	301,400	5,437,500	▲110,400	5,255,000	182,500	150,900	32,000	118,900
	2012年度	5,924,700	5,542,200	382,500	5,745,000	307,500	5,506,500	238,500	179,700	35,700	144,000
	2013年度	6,580,300	5,953,100	627,200	6,355,500	610,500	5,919,800	435,700	224,800	33,300	191,500
	2014年度	7,169,900	6,183,900	986,000	6,874,800	519,300	6,129,200	745,600	295,100	54,700	240,400
	2015年度	7,936,300	6,266,000	1,670,300	7,389,800	515,000	6,226,300	1,163,500	546,500	39,700	506,800
	2016年度	8,769,200	6,640,100	2,129,100	8,026,500	636,700	6,595,700	1,430,800	742,700	44,400	698,300
	2017年度	9,579,900	6,887,900	2,692,000	8,532,900	506,400	6,833,400	1,699,500	1,047,000	54,500	992,500

《実績》・沖縄県文化観光スポーツ部「入域観光客数概況」より

【図表7】 空路入域客のシミュレーション

●空路入域客シミュレーション①

		入域観光客数(人)		うち空路入域客(人)				うち海路入域客(人)			
		うち国内客	うち外国客	増減数	うち国内客	うち外国客	うち国内客	うち外国客			
見込み	2018年度	9,942,964	6,988,375	2,954,589	8,789,802	256,902	6,935,967	1,853,835	1,153,162	52,408	1,100,754
予測	2019年度	10,674,004	7,257,515	3,416,489	9,347,382	557,580	7,201,347	2,146,035	1,326,622	56,168	1,270,454
	2020年度	11,405,044	7,526,655	3,878,389	9,904,962	557,580	7,466,727	2,438,235	1,500,082	59,928	1,440,154
	2021年度	12,136,084	7,795,795	4,340,289	10,462,542	557,580	7,732,107	2,730,435	1,673,542	63,688	1,609,854
	2022年度	12,867,124	8,064,935	4,802,189	11,020,122	557,580	7,997,487	3,022,635	1,847,002	67,448	1,779,554
	2023年度	13,598,164	8,334,075	5,264,089	11,577,702	557,580	8,262,867	3,314,835	2,020,462	71,208	1,949,254
	2024年度	14,329,204	8,603,215	5,725,989	12,135,282	557,580	8,528,247	3,607,035	2,193,922	74,968	2,118,954
	2025年度	15,060,244	8,872,355	6,187,889	12,692,862	557,580	8,793,627	3,899,235	2,367,382	78,728	2,288,654

《見込み》・2018年4月～12月実績から年度見込みを算出

《予測》・過去5年間(2013年～2017年)の平均増減数を、2019年度以降の増減数とした

●空路入域客シミュレーション②

		入域観光客数(人)		うち空路入域客(人)				うち海路入域客(人)			
		うち国内客	うち外国客	増減数	うち国内客	うち外国客	うち国内客	うち外国客			
予測	2018年度	9,693,050	6,897,488	2,795,562	8,550,000	17,100	6,850,000	1,700,000	1,143,050	47,488	1,095,562
	2019年度	9,866,510	6,901,248	2,965,262	8,550,000	0	6,850,000	1,700,000	1,316,510	51,248	1,265,262
	2020年度	10,597,550	7,170,388	3,427,162	9,107,580	557,580	7,115,380	1,992,200	1,489,970	55,008	1,434,962
	2021年度	11,328,590	7,439,528	3,889,062	9,665,160	557,580	7,380,760	2,284,400	1,663,430	58,768	1,604,662
	2022年度	12,059,630	7,708,668	4,350,962	10,222,740	557,580	7,646,140	2,576,600	1,836,890	62,528	1,774,362
	2023年度	12,790,670	7,977,808	4,812,862	10,780,320	557,580	7,911,520	2,868,800	2,010,350	66,288	1,944,062
	2024年度	13,521,710	8,246,948	5,274,762	11,337,900	557,580	8,176,900	3,161,000	2,183,810	70,048	2,113,762
	2025年度	13,707,270	8,253,808	5,453,462	11,350,000	12,100	8,180,000	3,170,000	2,357,270	73,808	2,283,462

《予測：空路入域客》・2018年度～2019年度は横ばい、2020年度～2022年度は増加、2023年度以降は横ばいとした

・2020年度～2022年度は、過去5年間(2013年～2017年)の平均増減数をにて増加予測とした

《予測：海路入域客》・過去5年間(2013年～2017年)の平均増減数を、2019年度以降の増減数とした

3. 人泊数

(1) 現状分析

人泊数とは、入域観光客数に「平均滞在日数-1」を乗じて算出した宿泊人数の指標である。平均滞在日数は2010年度以降ほぼ横ばいで推移している。一方で、入域観光客数は増加傾向にある(図表6)。このため、人泊数は入域観光客数の増加を背景に、増加を続けている(図表8)。

滞在日数2日の宿泊日数は1泊であるため(1泊2日)、人泊数の計算においては「平均滞在日数-1」にて算出している。そのため、滞在日数1日である海路入域客の人泊数は0日となる。海路入域客はクルーズ船での宿泊であり、県内宿泊施設は利用しないので、現状に一致していると考えられる。

よって、図表8の人泊数は、空路入域客のみの宿泊人数となる。

(2) 将来予測

人泊数のシミュレーションは2パターン予測した(図表9)。2パターンともに宿泊数予測の基となる平均滞在日数は、過去5年(2013年度~2017年度)の平均滞在日数にて算出している。よって、2パターンの違いは、空路入域客シミュレーション(図表7)の違いとなる。

●人泊数シミュレーション①：1日当たり人泊数は一貫して増加する予測

空路入域客シミュレーション①に「過去5年(2013年度~2017年度)の平均滞在日数-1」を乗じて算出した予測である。

●人泊数シミュレーション②：1日当たり人泊数は「横ばい⇒増加⇒横ばい」で推移する予測

空路入域客シミュレーション②に「過去5年(2013年度~2017年度)の平均滞在日数-1」を乗じて算出した予測である。

【図表8】人泊数実績

		平均滞在日数				人泊数(=入域観光客数×[平均滞在日数-1])				1日当たり 人泊数	うち繁忙期	うち閑散期	
		国内客		外国客		国内客		外国客					合計
		空路	海路	空路	海路	空路	海路	空路	海路				
実績	2010年度	3.78	1.00	4.57	1.00	15,001,714	0	541,212	0	15,542,926	42,583	52,718	37,984
	2011年度	3.83	1.00	4.89	1.00	14,871,650	0	709,925	0	15,581,575	42,689	52,849	38,079
	2012年度	3.75	1.00	5.07	1.00	15,142,875	0	970,695	0	16,113,570	44,147	54,654	39,379
	2013年度	3.83	1.00	4.95	1.00	16,753,034	0	1,721,015	0	18,474,049	50,614	62,660	45,148
	2014年度	3.84	1.00	4.72	1.00	17,406,928	0	2,773,632	0	20,180,560	55,289	68,448	49,318
	2015年度	3.89	1.00	4.85	1.00	17,994,007	0	4,479,475	0	22,473,482	61,571	76,225	54,921
	2016年度	3.78	1.00	4.71	1.00	18,336,046	0	5,308,268	0	23,644,314	64,779	80,196	57,783
2017年度	3.75	1.00	4.95	1.00	18,791,850	0	6,713,025	0	25,504,875	69,876	86,507	62,330	

《実績》・沖縄県文化観光スポーツ部「観光統計実態調査」「外国人観光客実態調査」より

(注1) 1日当たり人泊数の繁忙期、閑散期は、実績の5年間(2013年~2017年)の繁忙期および閑散期実績から倍数を算出して、平均値に乘じた

(注2) 入域観光客数実績に上記人泊数を乘じて算出

【図表9】人泊数のシミュレーション

●人泊数シミュレーション①

	平均滞在日数				人泊数(=入域観光客数×[平均滞在日数-1])				1日当たり 人泊数	うち繁忙期	うち閑散期	
	国内客		外国客		国内客		外国客					合計
	空路	海路	空路	海路	空路	海路	空路	海路				
2018年度	3.82	1.00	4.84	1.00	19,545,556	0	7,111,310	0	26,656,866	73,033	90,414	65,145
2019年度	3.82	1.00	4.84	1.00	20,293,397	0	8,232,189	0	28,525,586	78,152	96,753	69,712
2020年度	3.82	1.00	4.84	1.00	21,041,237	0	9,353,068	0	30,394,306	83,272	103,091	74,279
2021年度	3.82	1.00	4.84	1.00	21,789,078	0	10,473,948	0	32,263,026	88,392	109,429	78,846
2022年度	3.82	1.00	4.84	1.00	22,536,919	0	11,594,827	0	34,131,746	93,512	115,767	83,412
2023年度	3.82	1.00	4.84	1.00	23,284,760	0	12,715,706	0	36,000,466	98,631	122,106	87,979
2024年度	3.82	1.00	4.84	1.00	24,032,601	0	13,836,585	0	37,869,186	103,751	128,444	92,546
2025年度	3.82	1.00	4.84	1.00	24,780,442	0	14,957,464	0	39,737,906	108,871	134,782	97,113

《予 測》・実績の5年間(2013年~2017年)の平均滞在日数を、2018年度以降の増減数とした
 (注) 空路入域客シミュレーション①に上記人泊数を乗じて算出

●人泊数シミュレーション②

	平均滞在日数				人泊数(=入域観光客数×[平均滞在日数-1])				1日当たり 人泊数	うち繁忙期	うち閑散期	
	国内客		外国客		国内客		外国客					合計
	空路	海路	空路	海路	空路	海路	空路	海路				
2018年度	3.82	1.00	4.84	1.00	19,303,300	0	6,521,200	0	25,824,500	70,752	87,591	63,111
2019年度	3.82	1.00	4.84	1.00	19,303,300	0	6,521,200	0	25,824,500	70,752	87,591	63,111
2020年度	3.82	1.00	4.84	1.00	20,051,141	0	7,642,079	0	27,693,220	75,872	93,929	67,678
2021年度	3.82	1.00	4.84	1.00	20,798,982	0	8,762,958	0	29,561,940	80,992	100,268	72,245
2022年度	3.82	1.00	4.84	1.00	21,546,823	0	9,883,838	0	31,430,660	86,111	106,606	76,811
2023年度	3.82	1.00	4.84	1.00	22,294,663	0	11,004,717	0	33,299,380	91,231	112,944	81,378
2024年度	3.82	1.00	4.84	1.00	23,042,504	0	12,125,596	0	35,168,100	96,351	119,282	85,945
2025年度	3.82	1.00	4.84	1.00	23,051,240	0	12,160,120	0	35,211,360	96,469	119,429	86,051

《予 測》・実績の5年間(2013年~2017年)の平均滞在日数を、2018年度以降の増減数とした
 (注) 空路入域客シミュレーション②に上記人泊数を乗じて算出

4. 宿泊施設の収容人数

(1) 現状分析

沖縄県の宿泊施設実態調査では軒数、客室数、収容人数が公表されている。本レポートでは、収容人数を用いて需給バランスを考察する。2003年から2017年までの過去15年間の宿泊施設の収容人数の推移をみると、一貫して増加している(図表10)。特に2017年の実績は9,421人の増加と、過去15年間で最も多い増加数となっている。なお、この収容人数は、宿泊施設で提供できる1日当たりの収容人数である。

(2) 将来予測

収容人数のシミュレーションは2パターン予測した(図表11)。2パターンともに収容人数は増加するものとし、増加スピードに変化を加えた。

●収容人数シミュレーション①：収容人数は毎年4,400人ずつ増加する予測

2018年度から2020年度の見込みは、新聞報道等から弊社が集計した値を用いた。2021年度以降の予測は、過去実績の5年平均値(2013年~2017年)の4,400人を増加数として用いて算出した。

●収容人数シミュレーション②：収容人数は毎年9,400人ずつ増加する予測

2018年以降の予測は、2017年の実績値9,400人を増加数として用いて算出した。

【図表10】 収容人数の実績

		収容人数（人）							合計	増減数
		ホテル・旅館				民宿等	団体経営施設・ユースホステル			
		大規模	中規模	小規模	計					
実績	2003年	34,306	13,587	7,128	55,021	10,863	3,460	69,344	5,547	
	2004年	35,258	14,023	6,885	56,166	11,451	3,445	71,062	1,718	
	2005年	37,327	15,165	8,079	60,571	13,415	3,215	77,201	6,139	
	2006年	38,585	16,569	7,179	62,333	15,340	3,073	80,746	3,545	
	2007年	39,550	17,062	7,634	64,246	15,901	2,825	82,972	2,226	
	2008年	41,578	18,086	7,341	67,005	16,856	2,684	86,545	3,573	
	2009年	43,867	18,318	7,412	69,597	17,805	2,664	90,066	3,521	
	2010年	44,665	19,578	7,395	71,638	18,382	2,813	92,833	2,767	
	2011年	48,476	19,816	7,152	75,444	18,711	2,799	96,954	4,121	
	2012年	48,983	20,970	7,078	77,031	19,203	2,827	99,061	2,107	
	2013年	51,294	19,470	6,780	77,544	19,808	2,759	100,111	1,050	
	2014年	54,556	20,017	6,797	81,370	20,590	2,764	104,724	4,613	
	2015年	56,138	19,347	6,949	82,434	22,004	2,752	107,190	2,466	
	2016年	57,772	20,540	7,428	85,740	23,542	2,700	111,982	4,792	
2017年	60,678	22,391	9,670	92,739	25,573	3,091	121,403	9,421		

《実績》・沖縄県文化観光スポーツ部「宿泊施設実態調査結果」より
 ・2009年までは各年の10月1日現在、2010年以降は各年の12月31日現在

【図表11】 収容人数の予想

●収容人数シミュレーション①

		収容人数（人）							合計	増減数
		ホテル・旅館				民宿等	団体経営施設・ユースホステル			
		大規模	中規模	小規模	計					
見込み	2018年							125,075	3,672	
	2019年							129,528	4,453	
	2020年							136,136	6,608	
予測	2021年							140,536	4,400	
	2022年							144,936	4,400	
	2023年							149,336	4,400	
	2024年							153,736	4,400	
	2025年							158,136	4,400	

《見込み》・新聞等報道を、りゅうぎん総合研究所にて集計した数値
 ・収容人数が不明な施設は「客室数×2名」で計算した
 《予測》・実績の5年平均値（2013年～2017年）を算出して、2021年以降の増減数とした

●収容人数シミュレーション②

		収容人数（人）							合計	増減数
		ホテル・旅館				民宿等	団体経営施設・ユースホステル			
		大規模	中規模	小規模	計					
予測	2018年							130,803	9,400	
	2019年							140,203	9,400	
	2020年							149,603	9,400	
	2021年							159,003	9,400	
	2022年							168,403	9,400	
	2023年							177,803	9,400	
	2024年							187,203	9,400	
	2025年							196,603	9,400	

《予測》・2017年の実績値9,400人を、2018年以降の増減数とした

5. 宿泊施設の需給バランス

県内ホテルの需給動向を図表 12 のように 4 パターンに分けて検証し、グラフ化したのが図表 13 である。1 日当たりの人泊数をホテル収容人数で除して算出した。数値が大きくなると需給逼迫を示し、数値が小さくなると需給緩和を示している。

グラフでは平均需給率、繁忙期需給率、閑散期需給率を表示。平均需給率は、実績の 5 年間（2013 年～2017 年）の 60 カ月の月平均の空路入域客を用いて算出。繁忙期需給率は、月別で最も空路入域客の多かった 8 月（2013 年～2017 年の 5 年間の 8 月の平均値）を用いて算出。閑散期需給率は、月別で最も空路入域客の少なかった 5 月（2013 年～2017 年の 5 年間の 5 月の平均値）を用いて算出した。

（1）現状分析

2017 年度までの実績（※実績なので 4 パターンとも同じ結果）をみると、2015 年度から 2017 年度までの 3 年間は、需給逼迫の動きは一服し、ほぼ横ばいで推移している。この 3 年間の 1 日当たり人泊数は図表 8 のとおり増加しているが、それ以上に収容人数が増加（図表 10）していることから、需給逼迫の動きは一服したものと考えられる。

（2）将来予測

2018 年度以降の予測をみると、需給シミュレーション①と②、需給シミュレーション③と④に大きく分けることができる。4 パターンの需給シミュレーションを比較すると、2018 年度以降の需給が現状より逼迫するか緩和するかの分かれ目は、宿泊施設の収容人数の増加の違いである。前述の図表 11 の 2 パターンの予測では、東京オリンピックが開催される 2020 年時点では 1 日当たり約 13,000 人（年間では約 4,745,000 人）の差異、2025 年時点では約 38,000 人（年間では約 13,870,000 人）の差異が発生する。この差異が、需給率に大きな違いをもたらす結果となる。

●需給シミュレーション①…逼迫が続く

宿泊施設の収容人数は毎年 4,400 人ずつ増加する（図表 11）。那覇空港の処理容量は上限に達していないとの予測（図表 6）により、人泊数は増加（図表 9）する。人泊数の増加スピードが、宿泊施設の収容人数の増加スピードを上回るため、宿泊施設の需給は更に逼迫する。

●需給シミュレーション②…緩和⇒逼迫⇒緩和で推移する

宿泊施設の収容人数は毎年 4,400 人ずつ増加する（図表 11）。那覇空港の処理容量は上限に達するとの予測（図表 6）により、人泊数は「横ばい⇒増加⇒横ばい」で推移する（図表 9）。このため、宿泊施設の需給は「緩和⇒逼迫⇒緩和」となる。

●需給シミュレーション③…ほぼ横ばいで推移する

宿泊施設の収容人数は毎年 9,400 人ずつ増加する（図表 11）。那覇空港の処理容量は上限に達していないとの予測（図表 6）により、人泊数は増加（図表 9）する。人泊数の増加スピードと、

宿泊施設の収容人数の増加スピードが均衡するため、宿泊施設の需給はほぼ横ばいで推移する。

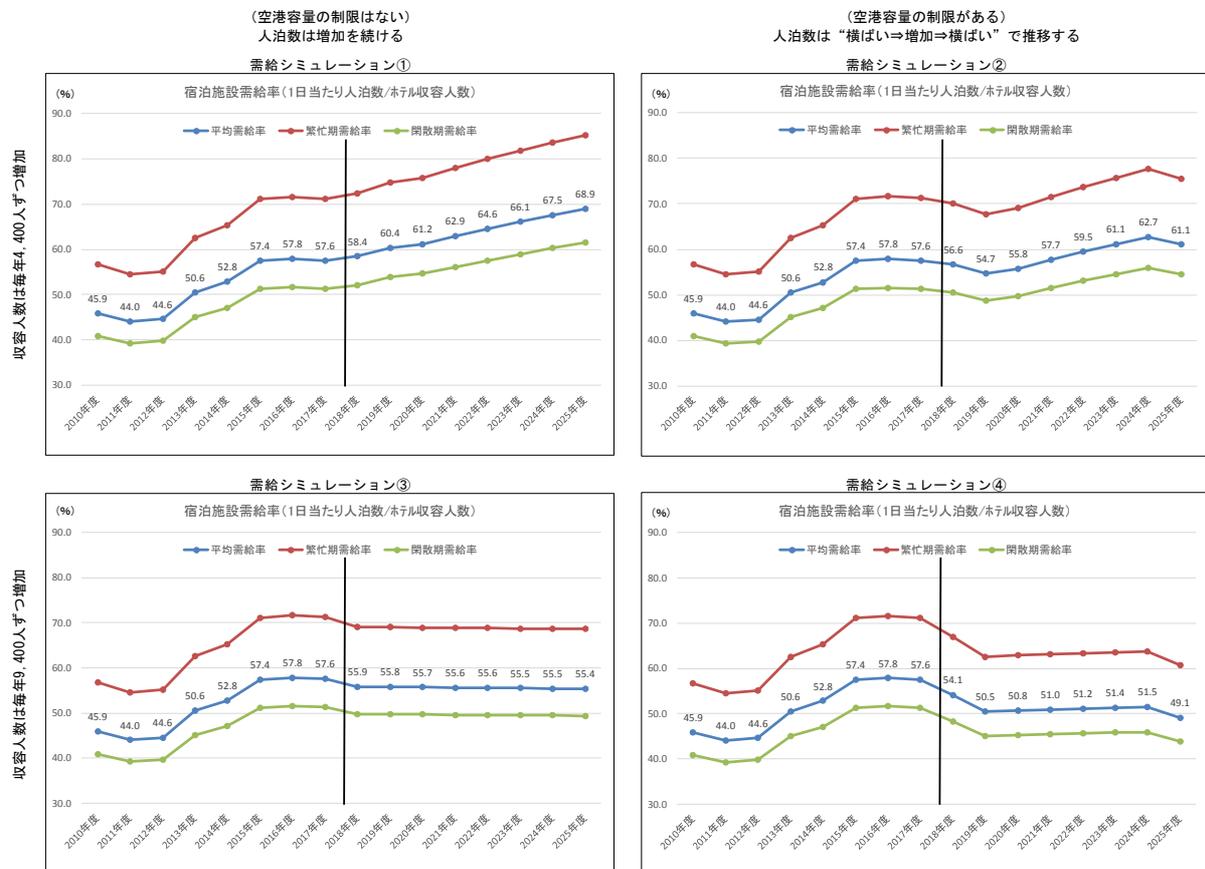
●需給シミュレーション④…緩和が続く

宿泊施設の収容人数は毎年 9,400 人ずつ増加する（図表 11）。那覇空港の処理容量は上限に達するとの予測（図表 6）により、人泊数は横ばい⇒増加⇒横ばいで推移する（図表 9）。宿泊施設の収容人数の増加スピードが、人泊数の増加スピードを上回るため、宿泊施設の需給は今後は緩和に転じる。

【図表 12】需給シミュレーションの組み合わせ

【図表8,9】 【図表10,11】	(空路入域客シミュレーション①) 人泊数シミュレーション① (増加継続)	(空路入域客シミュレーション②) 人泊数シミュレーション② (横ばい⇒増加⇒横ばい)
収容人数シミュレーション① (2013年～2017年の年平均値で増加)	需給シミュレーション①	需給シミュレーション②
収容人数シミュレーション② (2017年の実績で増加)	需給シミュレーション③	需給シミュレーション④

【図表 13】需給シミュレーションの結果



6. まとめ

宿泊施設の需給バランスでは、人泊数シミュレーション2パターンと、収容人数シミュレーション2パターンの組み合わせで、4パターンのシミュレーションを行った。4パターンのいずれの実現性が高いかを検討した結果、需給シミュレーション②の可能性が高く、次に需給シミュレーション④の可能性が高いと結論づけた。

結論づけるうえで、最初に注目したのは人泊数シミュレーションに影響を与える那覇空港の発着回数のキャパシティである。第2滑走路供用が開始されても、いずれは那覇空港の処理容量は上限に達する（図表4～7）との考えに基づき、需給シミュレーション②と④の可能性が高いと判断した。

次に、需給シミュレーション②と④の違いは、宿泊施設収容人数の増加数である。需給シミュレーション②は過去5年間の増減数の平均値である4,400人で毎年収容人数が増加する予測であるのに対して、需給シミュレーション④は2017年の実績値である9,400人で毎年収容人数が増加する予測である（図表11）。ただ、2017年の実績値である9,400人という数値は、過去15年の中で突出した実績であることが分かる（図表10）。そのため、需給シミュレーション②と④を比べると、過去5年間の増減数の平均値である4,400人で毎年収容人数が増加する需給シミュレーション②の可能性がより高いと判断した。

宿泊施設の需給バランスは、需給シミュレーション②では第2滑走路供用後は逼迫するが、2025年度以降は緩和に転じる。需給シミュレーション④では、既に緩和に転じている。つまり、どちらのシミュレーションにおいても、現状のように宿泊施設の収容人数が増加し続けると、近い将来、宿泊施設の需給バランスは緩和する可能性が高いといえよう。

需給バランスを緩和させないためには、那覇空港の処理容量が上限に達しないことが前提となる。そのためには早朝便や深夜便の就航のほかに、市街地上空の飛行経路の設定や、嘉手納飛行場の進入経路との関係による空域問題の解消、などの検討が必要となろう。

最後に、本レポートでは宿泊施設の需給について4パターンの需給バランスを示した。人泊数（空路入域客）と宿泊施設の収容人数のシミュレーション（予測）が基礎となっており、4パターンの実現性については意見が分かれるところであろう。いずれにしる、今回示した4パターンのシミュレーションが、今後の参考になれば幸いである。

なお、各シミュレーションで利用した統計は沖縄県全体での動きであり、地域ごとの動きは反映できていない。そのため、沖縄本島の特定地域や離島などの需給バランスについては考察できていない点は考慮願いたい。

(以上)